

# 戦火に散ったアスリート

⑭

## 西郷 準

### 生還すればプロ野球選手だった 西郷どんの孫

ほとんど知られていない事実だが、西郷隆盛の孫に、戦前の東京六大学野球の花形選手がいた。西郷準（ひとし）は立教大学の中心選手として、投打にわたって神宮球場を盛り上げた。しかし、終戦直前に戦死。戦地から戻っていたら、プロ野球選手になるはずだった。（新聞うすみ火記者、吉岡雅史

#### 早稲田の南村（巨人）、法政の鶴岡（南海）と首位打者争いを

西郷準は、菊次郎の13番目の子供（六男）として、1916（大正5）年に生を受けた。父・菊次郎は、西郷隆盛が奄美大島に流された折に、愛加那との間に長子として生まれ、のちに第2代京都市長を務めた人である。

幼少期から準は野球に打ち込み、鹿兒島二中に入学すると、2年生で

3番ショートの内野手を奪った。

甲子園出場をあと少しで逃し、1935（昭和10）年、準は立教に進学。秋の帝大（現在の東大）1回戦に、8番ピッチャーで公式戦初出場を果たした。

ホームランを含む4安打、投げては2失点完投と、鮮烈なデビューを飾った。

序盤に2点を奪われた時、スタンドからは「西郷どん、犬はどうした」とヤジが飛んだ。しかし、特大アーチのあと、しばらく拍手と歓声が鳴り止まなかったという。敵味方の関係なく、ひと振りで見客を魅了したのだ。

西郷は、本格派投手としてだけでなく、強打者としても神宮の顔となり、打率2位が3シーズンあった。特に38年は、春が早稲田の南村不可士（のちに巨人）、秋は法政の鶴岡一

### 本格派投手で、強打者 ひと振りのホームランで観客を魅了

人（のちに南海）と激しい首位打者争いを演じた。

その38年秋に西郷は、珍記録を残している。法政との2回戦で延長15回投げ抜き、2対2の引き分けだったが、21個のフォアボールを与えた。今なお、連盟の1試合最多記録として残る21四球に加え、被安打10で、よく2点で収まったものである。

西郷自身何度かケガに泣いたこともあり、そのころの立教は2位が3度あるものの、あと一歩で優勝に届かなかった。

#### 最終学年でキャプテン しかし優勝決定戦が中止

最終学年の40年に西郷がキャプテンを務めると、慶応、明治と同率トップで並んだ。ところが非常時体制のため、通常なら実施されるはずの優勝決定戦が中止となり、優勝は、連盟預かりとなってしまいう運もあった。

「立教大学野球史」は、巨人を引退して報知新聞の記者に転身していた三原脩の総評を転載している。

「立教の頑張れなかった原因は、やはり、監督者のない悲しさであろう。勝誇っている時には、なんでもないが、敗けがこんでくると、やはり監督が必要である。それは唯敗けを防ぐにうただけでなく、学生の気分を自暴自棄にさせない大きな力



西郷準の甥、隆文さん。背後の掛け軸「敬天愛人」は隆文さんの書

ある▼

立教は大正半ばに監督が辞任して以来、キャプテンを中心とした合議制でチームを運営していた。西郷にはエースで主砲、さらに指揮官としての重圧が双肩にかかっていたのだ。卒業後、帝國生命（朝日生命の前身）に就職してサラリーマンをしていたが、1年後の42年に入営した。西郷の球歴は、ここで途切れたのかと思いきや……

「戦争から帰ったら、プロの大映に入るのにならっていたらいいですよ」

仰天事実を教えたくれたのは、西郷どんのひ孫で陶芸家の西郷隆文さん（61）だった。隆文さんの父・隆泰さんは菊次郎の四男。つまり準の甥にあたる。鹿兒島県日置市で活動している隆文さんだが、たまたま百貨店の九州物産展で来阪していた。

#### 永田オーナー個人の目に スーパースターとして

アポなし取材にも隆文さんは、

気さくに対応してくれ、準の名前を出すや否や「スーパースターだったらしいね」と、真ん丸い目を細めた。ただ、大日本映画制作の永田雅一社長が、大映球団を立ち上げたのは戦後の47年のこと。大映に勧誘さ



神宮のスター選手だった西郷準の投球フォーム

れたというより、西郷は永田オーナー個人の目に留まり、話がまとまっていたと考えるべきだろうか。プロ入りか、「内定」したまま準が召集されたのは42年。そのまま出征していたら、少しは運命も変わったかもしれない。

というのも、応召する西郷のために、地元鹿兒島の鴨池球場で壮行試合が開催され、ここで西郷は長打を放って二塁に滑り込んだ際、鎖骨を骨折してしまった。

出征の遅れた西郷は、戦地で上官の猛烈ないじめに遭う。「お前はあの西郷隆盛の孫だから根性があるはずだ」というだけで、容赦なく殴られたという。

隆文さんは、「西郷どんのひ孫」として取材や講演を受ける機会が多いせい、話は簡潔だった。「もう、みなさん亡くなりましたけど、伯父の知り合いから、いろいろ聞かされてきました。普段は戦争と聞いても、特別な感情はわか

米迄は投げられると胸をさすっていた。「俺は出るぞ。一球も投げずに死んだとあっちゃあ、母校の先輩に死んだに申訳ないからな」。そう宣言する西郷見習士官に、然し同調の声を挙げたのは、ほんの二、三人だけだった▼

西郷が戦死したのはフイリビンのロンソ島。没年月日は45年2月26日と5月28日の2説があり、詳細は分からない。

立教野球部は、戦後12年経ってから慰霊祭を行っている。当時は長嶋茂雄とエース杉浦忠を擁して、黄金期にあった。悲運が続きまじった西郷には、せめてものはなむけになったのではないだろうか。

## タデジマ文化論 ヨコハマ日記

